

起伏の多い草原を、疾風のような速さで馬は駆け抜けている。その馬上で、聞起は雪華の無事を祈り続けている。朧月にもその心が伝わるのか、聞起を乗せて飛ぶように草原を駆けていた。一日で駆け抜ける。聞起はそう決めていた。朔州までではない。阿骨打の駐屯地まで。出来ると思つたわけではない。やるしかないと考えたのだ。朧月は並みの馬ではない。百里が限界と言われているが、朧月ならその倍、いやそれ以上走れるはずだ。聞起が選んだ馬だ。そして、ともに育つた馬だった。自分よりも信じられる。

聞起は幼い頃から馬に魅せられていた。賢く、美しく、そして何より、駆ける姿の力強さに。宋家村にいた数頭の馬とは、友と言えるほど心を通わせていた。実際、雪華を除けば馬という方が心落ち着けて過ごせた。村が賊に襲われた後、残つた馬は傷ついた二頭だけだった。怯えて、人が近づくのを許さなかった。聞起は根気よく馬に話しかけ、やがて馬も人への警戒を解いていった。三月ほどで馬が回復した頃、雪華から馬を集めるように言われた。聞起の馬への愛情を、知っていたのことだった。

聞起は馬を買い付けに遼に向かった。宋には馬が少なく、禁軍でさえ満足に替え馬を持っていない。遼では騎兵一騎につき二・三頭の替え馬を持っている。いくら遼が狩猟騎馬民族の国とはいえ、宋の騎馬隊は貧弱すぎた。宋はとつくに外に向かつていくことを忘れた国になつている。それはそれでいい。ただし、自国の民を襲う外敵がなければの話だ。外に向かうということは、必然的に外の人々に危害を加えるということだ。それは許されることではない。人々が納得のうえで結びつく、それこそ国と国の在り方だと思つていた。戦で国を刈り取る。そこには憎悪と諦め、そして癒えることのない哀しみしか残らない。聞起は三年前、嫌というほどそれを味わった。どうして人は争いを止めないのだろうか。どうして人は殺し合うのだろうか。聞起は、人へ

の絶望に陥りそうな自分を感じるのだった。

「駆けてくれ、朧月」

聞起は祈るしかなかった。

雪華姉ちゃんに何かあったら。聞起は恐ろしくて考えるのを止めた。姉ちゃんと呼んではいるが、聞起にとって、雪華はそれ以上の存在だった。あの惨劇の後、雪華は子供達を慰め、大人達を励ました。自分も父を失い、館を壊され、村人以上に悲惨な目に遭っていたのに、そんなことはおくびにも出さず村人の世話をしていた。聞起は、その哀しみをたたえた優しい眼差しを、今でもはっきりと憶えている。もともと優しい人だった。けれどあの後からは、勁つよさと慈悲深さが加わったように聞起には思えた。他の誰よりも、傷つけてはならない人だった。そんなことは俺が許さない。いや、俺だけじゃない。黄玉だったら俺以上に怒るだろう。黄玉は、雪華姉ちゃんをほとんど神のように思っている。あいつに報せないと。聞起は思った。

「急ぐぞ、朧月。おまえの名づけ親の一大事だ。どんなことがあっても助け出すぞ。それはおまえの脚にかかってるんだ」

朧月は、聞起の言葉に応えるように一声高くいなないた。

うろたえ、泣き崩れている伍小母さんを尻目に、無用は黙って厩うまに向かった。その面おもてに、いつもの柔らかさはない。

厩うまに着く前に、残月の怒ったようないななきと柵木に身体をぶつける音が聞こえてきた。

「残月、おまえにも分かるのだな」

無用はそう言っつて、残月の鼻面を撫でた。

「少し待っておれ」

無用は厩の奥に回って、薪小屋の扉を開けた。新鮮な木の香りと咽るような埃とが、一斉に無用の鼻を襲った。薪の束を放り投げ、無用は奥から何かの包みを取り出した。油の滲み込んだ厚手の麻布で、それはしっかりと包み込まれている。

「こいつを使うことになるとはな」

自嘲ぎみにそう呟いたが、その目には怒りの炎が燃え上がっている。ゆっくりと包みを解いた。銀色に鈍く光る二挺の板斧はんぶ。無用の面おもてががらりと変わった。

「これより無用の名を捨てる。三年ともにした名だったが、儂はもとに戻る。嬢さん、謀たはかって申しわけなかった。もつとも、賢い嬢さんのことだ、知ってて何も訊かなかったんだろうがな」

無用は、柄の端が鎖で繋がれた双斧を首にかけると、踵かかとを返して厩に戻った。

「残月、待たせたな。重くて大変だろうが、儂を太原府まで運んでくれ。帰りには、おまえのご主人様を乗せてやるからな」

そう言って無用は門をはずし、残月の背に乗った。残月は、嬉しそうに身震いをつした。

厩を出ると、伍小母さんが息を呑んで立ち竦んでいた。

「その双斧、もしや……」

「そうだ、騙してすまなかった。儂の名は無用ではない。儂は李達りたつ、銅堤山の黒旋風だ」

伍小母さんは少しの間黙っていたが、やがて思い切ったように口を開いた。

「どなたであつても、無用様は無用様です。私にとって最も頼りになる方に他なりません。どうかお嬢様をお助けください。黒旋風李達様と伺えば、かえって心安く吉報を待つことが出来ます」

「承知した。儂の命に代えて、嬢さんを助け出す。嬢さんの命に比べれば、儂の命なぞ鼻くそのようなものだ。伍氏、約束する。嬢さんを連れ戻す。ついては伍氏に頼みがある。宋伸を陳統のもとに遣つてくれ。太原府に直接向かうようにと、そして何をすればよいかは自分で判断せよと。さらにもう一つ。寇汪こうおうを太原府の南、龜伏山きふくざんにいる蘇源そげんという男のもとに遣つてくれ。そして、こう伝えさせるのだ。明日、太原府で黒旋風の名を聞いたら、直ちに南門を襲って退路を確保せよと」

宋伸も寇汪も、宋家村ではとりわけ騎乗の達者な男達だ。陳統はいつものなら、今頃麟州を出て宋家村に向かっているはずだった。陳統は三月に一度宋家村にやって来て、雪華と様々な情報を交換していた。明日がその日だ。今はもう、かなり宋家村に近づいているはずだ。

「それだけで宜しいのですか」

伍小母さんが訊いた。

「出来れば嬢さん達、女物の着替えや必要そうな物を用意しておいてくれ。そうだな、それを亀伏山の東の麓に置くように言ってくれ。明日の夜までにな」

「戻っては来ないのですね」

李達は黙って頷いた。

「そうですね、お尋ね者になるのですもね。分かりました。私もとうに覚悟を決めております。ここは私が守ります。当面の食べ物や、必要な物は私が用意して運ばせます」

「ありがたい。伍氏がいてくれて助かった。それから、寇汪にこれを持たせてくれ」

李達は板斧を包んでいた麻布を伍小母さんに渡した。厚手の黒い布だった。広げると、赤い文字で風と刺繍されていた。

「銅堤山にいた頃の旗だ。亀伏山に入ったら、必ずこの旗を掲げるように言ってくれ。そうすれば、向こうの方で見つけるはずだ」

「分かりました」

伍小母さんは旗を握り締め、じっとこの状況に耐えていた。

「それでは儂は行く。必ず報せを入れる。それまで祈っていてくれ」
李達を乗せた残月が前脚で土を搔くと、あつという間に正門を駆け抜けて行った。残月も助けに行きたいのだ。伍小母さんはそう思った。

蒋唐は息が切れそうだった。五十をとうに過ぎた身にとって、ここまで走り続けるのはきつかった。だが、曹瑛の命がかかっている。挫けるわけにはいかない。

勾欄の赤い門が目に入った。人影はまばらだ。急いで裏手に回った。

いた。手足をがんじがらめにされた曹瑛が、草むらの中に横たわっている。曹瑛は蔣唐をみとめると、大きく身体を揺すって助けを求めた。

「何ということを」

蔣唐は猿ぐつわを解き、ついで小刀で手足の縄を切った。ほどこうと暴れたのか、手首は血に染まっている。

「小父さん、ありがとう。本当に助かったわ。いきなり襲われてどうしようもなかったの」

あえぎながら、曹瑛が言った。

「偶然だったんだ、本当に。天のお導きとしか思えん」

そう言って、蔣唐は李吉のことを話した。殺したことを除いて。

「殴られたんだろう。左の頬が脹れている」

「大したことないわ。それより、雪華姉さんが大変。早く助けなきゃ」
曹瑛はよろめきながらも立ち上がり、表の道に出ようとした。その不自然な歩みが、蔣唐の不安が当たったことを教えていた。

一番怖れていたことだった。曹瑛の内腿に、二筋の血の跡がついている。蔣唐の心を、

耐え難い痛みが襲った。清い娘を……。

「曹瑛、大丈夫か……」

蔣唐の声は震えていた。

「大丈夫。こんなことで負けてはいられないわ。わたしなんかより、雪華姉さんの方がどれだけ酷いことをされているか」

だが、曹瑛の目には涙が浮かんでいる。

「あいつから聞いたの。魯權が知府を抱き込んで、雪華姉さんを罫に嵌めるって。わたしはどうなってもいい。雪華姉さんを助けなきゃ」

蔣唐は、曹瑛を抱きしめた。

「曹瑛、私に任せろ。おまえはこんなに傷ついている。それに、魯權の手の者がおまえを探し回っている。おまえは傷を癒すのだ。心のな」
「わたしも戦います。」

曹瑛の決意は固い。蔣唐は、止めることは出来ないだろうと思った。
「私にも手伝わせておくれ。おまえ一人で立ち向かうには、魯權は大

きすぎる。私に出来ることもあるはずだ」

「小父さんを巻き込むことは出来ないわ。今までさんざんお世話になって、今度も迷惑をかけるなんて」

「曹瑛、前に話したことがあったね。死んだ息子の蒋敬のことを。私はあの時逃げてしまったんだよ。蒋敬が理不尽に殺されても、その悔しさ、その悲しさを押し潰して、私は楽な道に逃げてしまったんだ。蒋敬が泣いているんだ。心はいつも冷たかった。それが曹瑛、おまえに出会ってから、少しずつ温もりが戻って来たんだ。私はもう逃げない。蒋敬が言うんだ。お姉ちゃんを助けてあげて、とな」

「小父さん……ありがとう」

蒋唐は通りに出て馬を借りた。この辺りでも蒋唐は顔が利き、馴染みの運送屋も多い。曹瑛を馬に乗せ、自分は馬の手綱たづなを取って蔵まで送った。馬に乗っていたので、人々は曹瑛の悲惨な姿に気づかなかったようだ。

蔵に着くと、曹瑛は奥に行き身体を清め、着替えをして戻って来た。手には短弓を持ち、肩には矢壺をかけている。

「小父さん、まず雪華姉さんの居場所を捜さなくては。知府の宮城か、魯權の屋敷か、その辺りだとは思うけど。心当たりはある」

「知府の屋敷だとしたら宮城の中だ。忍び込むのは難い。ここであれこれ考えても仕方がない。私が魯權のところに行って探してみる。あそこの番頭とは顔馴染みだ。うまく聞き出してみる。おまえは追われているから、ここを出て私の家で待っていないさい」

「分かりました」

「私の声でなければ絶対に開けないように。それまで傷の手当てをして、しっかりと養生していなさい。家の中の物は何でも自由にしているから、とにかく体力を取り戻すことだ」

蒋唐は、そう言い残し表に出た。春とは思えぬ強い陽射しが、一瞬蒋唐の目を眩くらませた。蒋唐は疲れているはずだった。だが、まったく疲れを感じない。むしろ、高揚感で力が漲っている。はじめて人を殺した。だが、不思議に心は揺れなかった。曹瑛の悲惨な姿を見てから

は、殺してよかったとまで思った。もう、もとの自分には戻れない。そして、それに満足している自分を感じていた。

魯權の屋敷はどこもなく落ち着きがなかった。いつもとは違う、騒々しさのようなものが漂っている。蒋唐は門番に名を告げ、番頭に取り次いでくれるように頼んだ。もちろん、いくばくかの銭も添えて。宋という国では、何かを頼むには金が必要だった。正規のものではなく賄賂がだ。それも、城郭まがたが大きくなるほど額も大きなものになる。太原府は、宋の中でも大きな城郭だ。前は北漢の宮廷があっただけに、華やかさも一際だ。

前に住んでいた河間府よりも賑わい、豊かでもある。だが、その分腐敗も進んでいるように思えた。河間府は遼に近いため、襲撃に対する警戒感はそれなりにある。だがこの太原府には、そうした緊張感は薬にしたくてもなかった。いくら宋・遼で不戦の盟約を結んでいても、何かのきっかけで盟約が破られるなど枚挙いふとまに暇がない。怠慢の上に築かれた繁栄。蒋唐は、ふとそんな思いに駆られた。

「どうなさいました。蒋唐様」

番頭が出て来て声をかけた。

「魯權様に用があるのだが」

すかさず、小粒銀を番頭の手握らせる。

「あいにく、所用で知府様の屋敷に出向いております。ご用件なら、私が明日伝えておきます」

「いや、いないならそれでいいんだ。それにしても、何か厄介事でもあったのかな。今時分知府様と会うなんて、あまり記憶にないが。番頭さんは何か聞いていないのかい」

小粒銀の効き目は絶大だった。

「他ならぬ蒋唐様だからお話するのですが、実はあの宋家村の生意気な小娘、あいつが捕らえられたのですよ。遼との蜜謀とのことですが、そんなのはどうだっていいのです。魯權様に恥をかかせた小娘なんか、さっさと殺ころしてしまえばいいんですよ」

「ほう、そんなことがあったのい」

「今頃は、茶に入れた眠り薬でぐっすりでしょうな」

「眠り薬……気づかれませんか」

「最近泉州せんしゅうから取り寄せた眠り薬がありましてね、こいつは無味無臭、溶かしても色がつかず、おまけに少しでも効果抜群という代物なんですよ。私が試させられたんですが、たった一口で眠っちゃいましたよ。見ても嗅いでも分かりません」

「そうかい、そんな物があるんだ。それで、その娘はここに運んで来るのかい」

「まさか。そんな面倒なことは御免ですよ。今晚は、知府様の屋敷に近い牢営に入れておくらしいですよ。二更に迎えに来いと言われてますから」

「そんな遅くに大変だね」

「まあ、これも仕事ですから」

蔣唐はもう一度小粒銀を握らせると、礼を言って番頭と別れた。うまく居場所を聞き出せた。牢営の場所は知っている。宮城の正門を入って右の端、武器庫の隣だった。

太原府に来た時、まず調べたのが宮城だった。河間府には、こんな立派な宮城はない。物珍しさも手伝って、こっそり宮城の中を探索した。それが今役に立つ。曹瑛に報せなくては。蔣唐の心は逸った。今頃宋雪華がどういう目に遭っているか。蔣唐の脳裏に、曹瑛の哀しい姿が浮かんできた。あんなに素晴らしい娘を。怒りが、蔣唐の身体に別人のような力を与えた。夕闇の中を駆け抜ける蔣唐の姿は、強健な若者のように見えた。

袁偉はかなりの量の酒を飲んでいて。黄文炳に役目を果たしたことを告げてから、ずっとこの飯店で酒を飲み続けていた。もう、飲みはじめて八刻になる。店の給仕も呆れていたが、袁偉をよく知っていたので止めることはなかった。

「儂はただの都頭だ。何が出来る」

普段の倍以上飲んではいしたが、酔いは感じなかった。ただ、とりとめもなく独り言を繰り返すだけだ。

袁偉は太原府の役人ではない。百里ほど南の、大谷だいこくけん県の歩兵都頭だった。黄文炳が太原府の知府に就任した二年前から、主に黄文炳の私的な仕事を任せられている。黄文炳と大谷県の知県が進士及第の同期で、その縁で知県が袁偉を推薦したのだった。どうして自分が推薦されたのかは分からない。黄文炳が、公にはしたくない仕事を任せられる人間を捜していて、それに自分が合致したとしか思えない。太原府の者は使いたくなかったのだろう。そこで、知り合いの大谷県の知県に依頼したのだろう。同じ進士及第という科挙合格者であっても、太原府の知府と大谷県の知県では大きな開きがある。黄文炳は、宰相である蔡京さいけいの家塾の教師だったという。教えていたのは、蔡京の長子、蔡攸さいゆうだった。今の宋では、進士及第であつてもそう素晴らしい職には就けなかった。官僚が余っているということもあるが、何より、金で役職を買ったり縁故で職に就いたりする者が多すぎた。胥吏など、そのほとんどが金か世襲でなつた者ばかりだった。金でなつた者達は、それを回収しようとする。給金はなく、とても回収など無理だから、賄賂に頼るしかなくなる。ひどい者になると、勝手に諸税を上げたり、理由をつけて臨時の税を徴収することもある。民にとってはたまつたものではないが、国がそれを革あらためることはかつた。そうして民から搾り取つた金は、宮廷や高官への贈り物となり、多く献金する者ほど出世し、同じことを繰り返す。皇帝徽宗からしてそうした金を喜び、自らの趣味である書画骨董を買い漁り、奇石集めに目の色を変えている。それを支える宰相の蔡京も、無類の賄賂好きときている。上がそうであれば下が革まるはずがない。結局馬鹿を見るのは、額に汗する民草だった。

「儂は何をしてきたのだろう」

袁偉はとまどっていた。これまでは、理不尽と思える命令にも唯々諾々と従ってきた。嫌だという気持ちはあつたが、終わればすぐに忘れることが出来た。黄文炳に対しては、好きとか嫌いとかの感情をい

だかなかった。地方の高官など、どれも似たようなものだ。実際、大谷県の知県にしても、規模は小さいものの黄文炳と変わるところはない。他県の役人を私用で使う。そんなことも珍しいことではない。地方高官が意のままに出来ることの一つだった。

「どうしてこんなに気にかかる」

袁偉は苛立った。今度の仕事は簡単なものだった。田舎の小娘を騙しておびき出すだけだった。それが、なぜか袁偉の心をささくれ立たせている。あの目だ。袁偉は思った。真っ直ぐな、澄んだ目だった。

三年前、あの村は賊に襲われ、壊滅的な打撃を受けたと聞いていた。保正であった娘の父親も死に、多くの村人が殺されたという。そんな村は今まで何度も見てきた。もっと悲惨な村も、より被害の軽微な村も。だがあの村は、それらどの村とも異なっていた。本当に賊に襲われたのかと疑うほど完全に復興している。村人の表情は明るく、何より村全体に活気が溢れている。あの娘の力だと言われている。会う前は大げさだと思っていた。会った後はなるほどと思った。

「見事なものだ、宋雪華」

袁偉は声に出して呟いた。

十九で、士兵として廂軍に入った。遼では十五で兵役に就く。それから比べれば遅いと言える。廂軍ではこれといった軍事訓練もなく、堤防を補修したり川底を浚渫したりと、土木工事ばかりやらされた。

それが嫌だというわけではなかったが、ある時、禁軍の将校という男が巡検に来て、おまえ達は落ちこぼれだ、仕事にあぶれ不正をはたらかないように、廂軍として仕事を与えてやっているのだと言った。その時自分の身体の奥で、抑えきれないほどの怒りが生まれた。それから武芸を習った。二年経ち、廂軍の中で誰も敵う者がいなくなった頃、大谷県の歩兵副都頭に推薦された。推薦者は、剣を教えてくれた武芸の師匠だった。剣の教えを請った時は、おまえには武の才がないと断られた。だが、諦めず門の前で一月粘った。師匠はついに根負けし、弟子として剣を教えてくれた。上達は遅かったが、その分修練に励んだ。師匠がもうよいと言った時、廂軍の中で自分に敵う者はいなかつ

た。廂軍に入るまでは、何の望みもないただのごろつきだった。廂軍に入り、生まれてはじめて一つのことに打ち込み、思ってもみなかった役職に就いた。それから無難に職務をこなし、四十の今では都頭になっている。剣の師匠は十年前に亡くなったが、今でも深く感謝している。努力すれば、いつか道は拓ける。それが師匠の口癖だった。

袁偉は今、師匠のもとで懸命に修練していた頃を思い出していた。あの頃の自分に、恥ずかしくはないか。おまえは、あの娘を陥れる陰謀の片棒を担いだのだぞ。あの娘に何の罪がある。素晴らしい娘ではないか。罪深きはどちらだ。魯權や黄文炳ではないか。それなのにおまえは、これから花開こうとしている清い才を、亡き者とする側にいる。それがおまえの生き方なのか。それで師匠が喜ぶのか。

袁偉の心の中に、苦い悔恨が広がりはじめた。今がはじめてではなかったのだ。もつとずつと前から、この苦い種はあつたのだ。それはおそらく、はじめて黄文炳の汚れた仕事を請けた時から。目を背け、見ないようにして、何事もないように自分を騙して生きてきたのだ。今日、あの娘の澄んだ目が、それを気づかせてくれたのだ。

袁偉は杯を置いて、給仕を呼んだ。

「長く粘ってすまなかったな」

そう言って小粒銀を一つ、卓の上に置いた。

「都頭様、こんなにいただいちゃ」

給仕が驚いて目を剥いた。

「いいんだ。世話になったからな」

袁偉はゆつくりと立ち上がった。

もう迷わなかった。自分が本当にしなければならぬことは何なのか。その答えは、ずっと前から心の中にあつたのだ。

「分かっています、師匠。自分に恥じないように生きてみます」

店を出る袁偉の目に、酔いの濁りは見られなかった。

雪華は突然の衝撃で目を覚ました。左頬にひりひりする痛みを感じ

る。男が三人、笑いながら見ていた。頭の中に濃い霧がかっているように、まとまりのない記憶しか甦ってこなかった。知府の屋敷に着いたのは憶えている。前庁で茶を出された。着いた時に茶とは、と訝（いぶか）つたが勧められるまま飲んだ。それからの記憶がない。あの茶に。雪華は自分の失態に臍（へそ）を嚙んだ。両手を縛られ、天井から下がる太い縄に括りつけられている。足先がようやく届く高さだ。

「目が覚めたか、宋雪華」

魯權が嬉しそうに言った。

「ここはどこです。なぜこんなことを」

雪華の声はくぐもっていた。

「ここはな、宮城の牢営だ。なぜと訊かれても答えようがないな。書いて言えば、おまえが邪魔だからというところかな」

魯權はにやりと笑った。その醜怪さに、雪華は目を背けそうになった。

「痛い目には遭ってもらうが、命まで獲（と）ろうとは思わん。ただし、儂の頼みを聞いてくれたらの話だがな」

何か焦げる臭いがした。部屋の奥に、赤々と炎を上げる炭火が見えた。その上に、これも赤く輝く鉄の棒が炙（あぶ）られていた。それが何に使われるのか、雪華は考えるのを止めた。

「長々と話すのは趣味ではない。単刀直入に言おう。宋雪華、遼との交易を儂に譲れ。西夏との交易もだ。素直に譲れば命までは獲らん」

「やはりそういうことか」

吊られた手首の痛みに耐えながら、雪華が言った。

「頭は回るが、まだ若い。おまえを嵌めることなぞ造作もない。この度は、知府様のお力を借りて万全を期したが、なあにおまえのような小娘一人、ひねり潰すのはたやすいことだ。三月前、儂が穏やかに持ちかけた時に言うことを聞いておれば、こんな目に遭わずにすんだのだ。馬鹿な娘だ。儂を罵った代償は高くつくぞ」

魯權は隣の男に目配せした。魯權の家宰、確か丁洪（ていこう）という男だと、

雪華は思った。

「こら、娘。おまえは遼の將軍と何を企んでおったのだ。素直に吐かぬと痛い目を見るぞ」

この男が知府の黄文炳か。なるほど、民の生き血を吸ってここまで肥えたか。そうか、阿骨打將軍と会っていたのを見られたか。それなら言い逃れは出来ないな。雪華は覚悟を決めた。

「断る。どうせ生かしておく気はないのだろう。わたしも屈する気はない。さっさと殺せ」

「娘、素直に話せばすむことだ。魯權だって、おまえを殺そうとまでは思っておらぬ。話せばよいのだ」

黄文炳の言葉を、魯權は冷ややかに聞いている。

「儂は知府様ほどあまくはない。恥をかかされた恨み、忘れたことはないわ。やれ、丁洪」

丁洪が雪華に近づき、胡服の上を剥ぎ取った。雪のように白い肌が、薄暗い牢営の一室に輝いた。

「ほう……これは美しい。顔も綺麗だが……。太原府広しといえど、これほどの娘はおらぬ。魯權、死なせてはならんぞ。この娘、儂がもらう」

「生きていればの話ですがね」

魯權ではなく丁洪が言った。その目は怪しく輝いている。

「おまえの馬は、もうとつくに逝っちまってるぜ。おまえもそうならないようにな」

雪華は目を閉じた。馬は殺されたらしい。まだ三歳の若馬だった。宋家村を発つ時、残月がひどく暴れ、言うことを聞かなかったので乗り換えたのだった。そんなことは今までなかった。きっと、残月はわたしを止めようとしたのだ。愚かだった。雪華は心から悔いた。

「おい、覚悟は出来たかい」

丁洪の顔は興奮で歪んでいる。

「やれ」

魯權の声が響いた。

丁洪が真つ赤に焼けた鉄の棒を持って来た。雪華は顔を背けた。
「へへっ、俺を恨むなよ。首を縦に振らないおまえが悪いだぜ」
絶叫が響いた。肉の焼ける嫌な臭いと、妙に白い煙とが牢営の中に
充滿した。

「こりやいいいぜ。こんな綺麗な肌が、真つ黒になっちまいやがった。
こりや傑作だ。さあ、もつといくぜ。死んでくれるなよ」

丁洪は腹の次に、形のよい胸に鉄の棒を押し付けた。雪華はもう声
を上げなかった。齒を食いしばり、必死で苦痛に耐えていた。

「美しい……」

黄文炳が放心したようにつぶやいた。

「止めよ。これ以上この娘を傷つけてはならん。止めるのじゃ」

腕にしがみついた黄文炳を、丁洪は振り払った。

「邪魔すんじゃねえ。てめえも丸焦げにされてえか」

黄文炳は尻餅をつきながら、魯權に向かって言った。

「魯權、この無礼者を外に出せ」

魯權は嘲るような表情を見せた。

「知府様、これが私どものやり方です。丁度いい機会だ。知府様も肝きもに
銘じておられるがよろしい」

「きさま……」

黄文炳は二の句を継げなかった。

「進士及第の知府様には、刺激が強すぎましたかな」

丁洪は雪華の背に鉄の棒を押し当てた。雪華の身体から、幾筋もの
煙が立ち昇った。足もとには、滴り落ちる血と汗が、大きな水溜りの
ように広がっている。

「どうだ、宋雪華。首を縦に振るのだ。そうすれば楽になるのだぞ」

雪華は魯權に向かって唾を飛ばせた。

「遼との交易は、誰の力も借りずわたし達が切り拓いたものだ。誰が
おまえなんか」

「威勢がいいのう。まだ足りぬとみえる」

「やるがいい。智と勇を父から貰った。仁と愛を母から貰った。その父と母の名にかけて、わたしは理不尽な者になど屈しない」

魯權は言いようのない屈辱感を覚えた。こんな小娘一人、何を手間取っている。なぜこんなに心が乱れる。この娘は何なのだ。こんなにまで傷ついて、いったい何を守ろうとしているのだ。命までかけて。魯權はどうしようもない苛立ちを覚えた。

「丁洪、やれ。死なせてもいい」

魯權の言葉は、微かな畏れを含んでいた。

丁洪はもう片方の胸にも鉄の棒を押し当てた。耐えていた雪華の口から、うっと呻き声が漏れた。

黄文炳は、この場に居続けるのに耐えられなくなってきた。皮の焼ける耐え難い臭いと、人とは思えぬほどの丁洪の異様な目。自分も加担したとはいえ、何か大きな間違いを犯したのではないかと思った。魯權と組んで、本当によかったのだろうか。黄文炳の心に、抑えきれない不安が広がってきた。

「娘、素直に言うのだ。遼の將軍と会って、何を話したのだ」

黄文炳の声は震えている。

「何も……。遼の中の立場とか……。わたし達の交易のこととか、賊に襲われた時のこととか……。他愛のない話を……」
なぜか黄文炳はほっとした。

「太原府を襲うとか、そういう話ではないのだな」

雪華は首を縦に振った。火傷を負った傷口からは、透明な液体に次いで赤い血が流れ出し、雪華が身体を揺らすたびに、何かの生き物のように白い肌の上を這いずり回った。

「魯權、もうよい。この娘が嘘を言っているとも思えぬ。何もなかった。それでよい」

魯權は恐ろしい形相で黄文炳を睨みつけた。

「知府様の用はお済みかもしれませんが、私の方はこれからです。邪魔はなさらないでいただきたい」

丁洪がもう一度真っ赤な鉄の棒を、雪華の柔肌に押し当てようとし

て止まった。

「魯權様、こいつ気を失ってますぜ」

魯權はなぜだか少し、気が楽になるのを感じた。

「気を失ったのなら仕方がない。まあ、ここまでよくもったものだ。大の男でも、なかなかここまででは耐えられんからな。今日のところはこれまでだ。知府様、扉の外に見張りを置いていただけますかな。鍵は私が預かります。よろしいかな」

黄文炳は慌てて頷いた。一刻も早く、この地獄のような修羅場から逃げ出したいと思った。

「もう儂は知らん。後は、おまえ達が好きにすればよからう」

「知府様、ついでと言っては何ですが、この娘の仲間達が助けに来るかもしれません。数は少ないのですが、中には面倒な者もおります。兵を出す方が無難かと」

黄文炳の顔に焦りの色が浮かんた。

「分かった。廂軍を一営※出そう」

※一営 兵五百の部隊

「戦えない兵ではありませんな」

魯權が皮肉混じりに言った。

「大丈夫だ。具冠ぐかんを出す」

「具隊長なら安心ですな。それでは、明日の夕までお休みください」

「儂の用は終わった。ここにはもう来ん。後始末だけはしっかりするのだ。儂とは関わりがない。そういうことだ」

黄文炳に、ようやく知府としての威厳が戻った。

「お任せください。私の独断でしたこと。牢営も、私が勝手に使用したこと。すべてはそういうことで」

黄文炳は大きく頷くと、足早に牢営を後にした。

「魯權様、一つしくじりが」

丁洪が魯權に言った。

「曹瑛が捕まりません。それと、李吉の死体が。李吉の首には、銀の簪が刺さっていたそうです。感づかれたのかもしれませんが」

魯權は少し嫌な顔をしたが、そのまま扉の方に足を進めた。

「放っておけ。たとえ感づかれたとしても、あんな小娘に何が出来る。それよりも黒い大男の方だ。奴は必ず奪い返しに来る。屋敷の警護を厳しくするのだ」

「もうすでに、二十人ほどの者を就けております」

「大丈夫かな」

「おそらくは。いざとなれば、具冠の兵も使います」

「具冠か。廂軍にしては珍しく、しっかりと兵を鍛え上げていると聞く。具冠自身も朴刀ぼくとうの達者だったな。抜かりはないだろう。曹瑛という小娘はおまえに任す。まだ物足りないのだろう」

そう言って魯權は、吊るされたまま気を失っている雪華の方に目を遣った。

丁洪はそれには答えず、ただ異様に赤く光る目で、雪華の悲惨な姿を見つめていた。